

矢掛町ベトナムフェスティバル企画運営者による語りの分析 —地方在住ベトナム人技能実習生の存在を可視化する活動の経緯の解明—

A Narrative Analysis of Organizers for the Vietnam Festival in YAKAGE Town:
an Activity to Visualize Existence of Vietnamese Technical Intern Trainees

長野 真澄

Masumi NAGANO

岡山大学全学教育・学生支援機構

教育研究紀要

第5号 2020年12月

矢掛町ベトナムフェスティバル企画運営者による語りの分析
—地方在住ベトナム人技能実習生の存在を可視化する活動の経緯の解明—

長野 真澄

A Narrative Analysis of Organizers for the Vietnam Festival in YAKAGE Town:
an Activity to Visualize Existence of Vietnamese Technical Intern Trainees

Masumi NAGANO

要旨：本稿では、地方部在住のベトナム人技能実習生を巻き込んだ地域のイベントの企画運営者2名のインタビュー分析を通じて、活動の経緯とその広がりの方を解明することを目指した。分析の結果、元々ベトナムや技能実習生と関わりのなかった一個人とその所属先の団体が、その地域で働く外国人の若者に対するホスピタリティと地域活性化への思いを原動力として、人的ネットワークを拡大しながら、イベントの実施に至った過程が明らかになった。また、複数回のイベント実施により、それまで「顔の見えない」外国人であった技能実習生の存在がその地域で可視化され、彼らとの共生を目指す他の活動へと広がりを見せていることが示された。

キーワード：ベトナム人技能実習生，地域活性化，多文化共生，SCAT

1. はじめに

岡山県小田郡矢掛町は、岡山市内から車で約1時間、県南西部に位置する人口14,000人ほどの町である。かつては西国街道の宿場町として栄え、参勤交代の際に宿泊施設として利用された本陣や脇本陣が現存するなど、古い町並みを残している。近年では、そうした観光資源を活用しつつ、古民家再生事業に力を入れ、古民家を利用して宿泊施設を作るなどし、2018年にはイタリア発祥の「分散型の宿」を意味する「アルベルゴ・ディフューズ (Albergo Diffuso)」タウンとして日本で初めて認定され、注目を集めた⁽¹⁾。その一方、同町は岡山県の過疎地域に指定されており⁽²⁾、少子高齢化と都市部への人口流出による人口減少が続く、特に生産年齢(15～64歳)人口の減少は著しい。国勢調査によると、1980年の生産年齢人口は11,549人(生産年齢人口割合62.8%)であったが、2015年には7,417人(52.2%)まで減少している。そんな中、近年増加傾向にあるのが町内在住の外国人である。2019年3月末時点で356名の外国人が矢掛町に住み、その多くが技能実習生で、出身国別ではベトナムが最も多いという⁽³⁾。

そうした状況の中、矢掛町では、2017年以降、観光施設である「やかげ町家交流館」の主催で、毎年11月に矢掛町ベトナムフェスティバルが開催されるようになった⁽⁴⁾。

本稿では、同フェスティバルの企画運営者 2 名へのインタビューの分析を通し、活動の経緯と広がりをつまらかにすることを目的とする。

2. 問題と目的

総務省が毎年公表している統計「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」によると、日本の外国人人口は毎年増え続けており、2020年1月時点で約287万人と過去最高になっている。2010年代には、都市部だけでなく、かつては在住外国人が少なかった地方部においても外国人人口が増加しており、その要因として、諸地域で労働力の確保が喫緊の課題となっていることが挙げられる(e.g., NHK取材班, 2019; 徳田, 2019)。特にベトナム人技能実習生の増加が著しく、二階堂(2016)は、彼らが地方部における製造業の現場で欠かせない存在となっている現状を指摘した。厚生労働省「外国人雇用状況届出状況」によると、2019年10月時点の全国の技能実習生数は38万3,878人で前年比24.5%増、その約半数をベトナム人が占める。岡山県においても、2019年に5,628人のベトナム人技能実習生の雇用が届け出られており、2014年時点のベトナム人技能実習生の雇用が854人であったことからすると、わずか5年で6.5倍以上にも膨れ上がっていることがわかる⁽⁵⁾。

技能実習制度は、開発途上地域への技術移転を図り、人材育成を通じて当該地域の経済発展に寄与することを目標に掲げ、1993年に制度化された⁽⁶⁾。その目的とは裏腹に、実際には「全国の中小零細企業に対して低賃金の労働者を供給(望月, 2019)」するシステムとして機能しており、労働基準関係法令違反や人権侵害、それらを要因とする「失踪者」の増加など、数多くの問題が指摘されている(e.g., 巢内, 2019; 望月, 2019)。しかし、2020年11月現在、技能実習制度の対象職種は制度創設当初の製造業と建設業の17職種から、農業や漁業、介護を含む82職種150作業まで拡大された上、2017年に最長実習期間が3年間から5年間に延長されるなど、人口減少や少子高齢化が進む中、労働力としての技能実習生への依存はますます強まっている。一方で、急増する技能実習生の社会への適応に向けた支援は監理団体や受け入れ企業任せになっていることが多く、極めて限定的である。技能実習生も長時間労働や節約生活の中で、言語の問題もあり、地域社会と関わる機会をなかなか持てないなど、技能実習生が数多く存在しているにもかかわらず、社会から見えづらい存在となっているのが現状である。

そんな中、近年、地方自治体が、地域産業の担い手として技能実習生を積極的に受け入れ、支援をしようとする動きも散見される。二階堂(2019a, 2019b)では、岡山県美作市が、市長のリーダーシップのもと、地域創生政策の一環としてベトナムとの関係強化を進め、地元商工会や企業、市民を巻き込みながらベトナム人技能実習生の積極的な受け入れを推進している事例が紹介された。具体的には、美作市ではベトナム人技能実習生の生活支援のために市役所にベトナム人嘱託職員を配置し、市民を対象としたベ

トナム語講座やイベントを通じて市民との交流機会を創出したり、技能実習生を対象とした市内バスツアーを開催したりしているという。また、中園（2020）では、北海道紋別市の事例が紹介されている。紋別市は、2018年に市内在住の技能実習生と市民との交流拠点として「国際交流サロン」を開設し、そこに市役所職員と通訳を配置して、技能実習生が利用できるフリーWi-Fiや交流スペースなどの設備を整えるとともに、日本語学習や日本文化体験の機会を提供しているという（中園、2020）。美作市や紋別市の取り組みは、技能実習生が地域の産業を支える重要な担い手であるという認識のもと、以前は監理団体や受け入れ企業に任せきりであった技能実習生への生活支援や地域での交流に、地方自治体が積極的に関与するようになった事例だといえる。

一方、矢掛町で2017年以降展開されている矢掛町ベトナムフェスティバルやその他の技能実習生を対象とした町内の活動は、行政を中心としたものではなく、「やかげ町家交流館（以下、交流館）」の館長A氏の働きかけを発端としたものである。交流館は、矢掛町の中心部に位置し、同町の古民家再生事業の第1号として、築80年を超える古民家を改修して2014年に設立された。旧宿場町として町おこしを進める中で、地域の人や観光客が気軽に集まり、交流できる場所にするという目的のもと、観光案内、土産物販売、喫茶や食事の提供などの他、毎週日曜日にはコンサートや講演会、落語会、日曜朝市などのイベントを開催している⁽⁷⁾。交流館を運営しているのは、町が10%、町民が90%を共同出資して設立した第三セクター、株式会社やかげ宿であり、A氏は同社の代表取締役専務と、交流館館長を兼務している。

矢掛町ベトナムフェスティバル（以下、フェスティバル）は、交流館の主催で2017年から毎年11月に実施されている。A氏を実行委員長として、交流館のスタッフ数名で実行委員会を組織し、矢掛町や同町教育委員会の後援と、技能実習生を抱える地元企業やその他企業の協賛により開催され、ベトナム人技能実習生は無料でフェスティバルに参加できる。フェスティバルにおける各種活動や屋台の運営は、倉敷市の監理団体や、ベトナム人留学生を多く抱える岡山市の大学、そして、福山市に本社を置くベトナム料理店などの協力のもと、行われている。フェスティバルの主な内容は、ベトナムの歌やダンスなどを披露するステージパフォーマンス、ビンゴ大会、カラオケ大会、そして、屋台でのベトナム料理の提供である。フェスティバルへの参加者数は、主催者発表で2017年の初回が約500名、2019年の第3回は約1,000名であった。第3回は町外在住の技能実習生の参加も多く、3年間で参加者が倍増したことがわかる。

フェスティバルを企画した交流館館長のA氏は、もともとベトナムや技能実習制度について詳しいわけではなく、フェスティバルの実行委員会を構成する他の委員についても同様であった。A氏によると、通常、交流館に矢掛町在住の技能実習生が訪れることはなく、フェスティバル実施以前は、交流館とベトナム人技能実習生の接点はほぼ皆無だったといっている。そのような状況の中で、どのようにして、フェスティバルが

企画され、実施されるに至ったのだろうか。また、矢掛町では、町民と技能実習生の交流機会がさらなる広がりを見せつつある。本稿では、A氏と、フェスティバルの実際の運営にあたったB氏へのインタビューの分析を通じて、活動の経緯と広がりを解明することを目的とする。徳田（2019）では、今後ますます地方部で外国人人口が増える可能性を見据え、地方部の各現場でどのような取り組みや工夫が行われているのか、という知見の蓄積の重要性が指摘された。本稿では、行政が中心ではなく、一個人やある団体が中心となって、日頃、地域社会から見えにくくなりがちな技能実習生の存在を可視化し、交流活動を拡大させている矢掛町の事例を扱う。

3. 方法と対象

2019年11月17日に行われた第3回フェスティバルを挟み、2019年11月12日と同26日の2回にわたってフェスティバルの企画運営担当者であるA氏とB氏を訪問し、対面形式による半構造化インタビューを実施した。インタビューで得られた音声データをもとにテキストデータを作成し、質的データの分析手法であるSCAT（Steps for Coding and Theorization）で分析を行った。SCATは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、「データの中の着目すべき語句」「それを言いかえるためのデータ外の語句」、「それを説明するための語句」、「そこから浮き上がるテーマ・構成概念」の順にコードを付していく4ステップのコーディングを持つ。浮き上がったテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、それをもとに理論を記述する分析手法である（大谷，2008；大谷，2011）。

インタビューの中で明らかになった情報も含めて、対象者について表1にまとめる。交流館館長のA氏（80代，男性）は、フェスティバル実行委員会の委員長を務め、企画発案や、外部での情報収集や広報，協力・協賛団体の募集などを担当した。岡山市在住で、以前は岡山市に本社を置く民間企業の役員を務め、交流館設立の準備段階にあたる2013年から、矢掛町長の依頼により交流館の業務に関わるようになった。一方、交流館の事業部長を務めるB氏（60代，男性）は、フェスティバルで機材や食材の手配や会場準備，当日のスケジュール管理と運営などといった部分の中核を担った。B氏は矢掛町の周縁部出身であり，長年，岡山県内や他県の民間企業に勤め，50代後半で矢掛町に戻った後に，町役場の臨時職員として働いた。その時に開館直前の交流館の職員募集の話を聞き，2014年から現在の業務に携わるようになった。以前の職種は全く異なるものだったが，交流館では日頃からイベント運営に関わる他，交流館内の食堂のシェフも務めるなど，幅広く業務を担当している。

表 1 インタビュー対象者

対象者	A 氏	B 氏
役職	交流館館長	交流館事業部長
フェスティバルでの担当	企画発案，外部での情報収集と広報，協力・協賛団体の募集と連絡	機材や食材の手配と会場準備，当日のスケジュール管理と運営
経歴	80 代男性。岡山市在住。かつては岡山市に本社がある民間企業に勤務。2013 年から交流館勤務。	60 代男性。矢掛町出身。町外の民間企業に勤務後，2014 年から交流館勤務。

4. 調査結果

両氏へのインタビューは 2 回とも個別に各 20～30 分程度であり，合計 126 分 40 秒の音声データが得られた。音声データから，固有名詞は言い換えるなどの編集を加えながらテキストデータを作成し，その中からフェスティバル実施の経緯や感想，活動の広がりに関するテキストを抽出して分析対象とした。

4-1. A 氏のストーリーライン

A 氏のインタビューで得られた分析対象のテキストは，話題ごとのまとまりが認められ，「フェスティバル発案のきっかけ」，「フェスティバルの企画運営」「第 1 回及び第 2 回フェスティバルの感想と第 3 回への期待」「第 3 回の感想と今後の課題」「活動の広がり（日本語教室の発案）」に分類された。これらの分類に沿って，表 2 にストーリーラインを記述し，以下で発言を引用しながらストーリーラインを説明する。

4-1-1. フェスティバル発案のきっかけ

A 氏は，以前から，交流館の前の道を自転車で通り過ぎていく外国人の存在が気になっており，彼らがどうして矢掛町の観光の中心でもある交流館に立ち寄りもしないのか，疑問に思っていた。ある時，友人の地元企業経営者から，彼らがベトナム人技能実習生であり，矢掛町の複数の工場で，当時 200 名を超えるベトナム人技能実習生が働いていることを聞いた。町おこしと観光促進を担う立場から，彼らに興味を持った A 氏は，いくつかの工場を訪問する中で，彼らが国の家族のために日々，遊びに行くこともせず，切り詰めた節約生活を送っていることを知り，「せっかく矢掛町で暮らすのだから，矢掛町での楽しい思い出を持って帰ってほしい」というホスピタリティと，「町民と交流をしてほしい」という思いでフェスティバルの発案に至った。

4-1-2. フェスティバルの企画運営

A 氏がフェスティバルの実施に向けてまず取り組んだのは，情報収集と，協力者の発掘であった。矢掛町とその近辺で技能実習生を受け入れている企業 10 社程度を訪問して協力を依頼した他，技能実習生の監理団体や，ベトナムに工場を持つ企業からも協力

を取り付けた。また、在日ベトナム領事館やベトナム航空などベトナムを代表する機関や企業に協力を求めた他、知り合いから、ベトナム人留学生を多く抱える岡山市の大学について聞き、同大学にも訪問して協力を依頼した。A氏は、元々持っていた人的ネットワークを活用し、知り合いから知り合いへと話を繋げ、相手のところに実際に足を運んで協力者を増やしていった。もともとベトナム人の知り合いがいるわけでもなく、ベトナムについて詳しいわけでもなかったA氏は、協力者を獲得していく中で、様々な情報を得、フェスティバルで実施する内容を固めていった。例として、大学から、ベトナム人留学生によるベトナム料理屋台の出店や、ベトナムの歌やダンスなどのステージパフォーマンスが提案され、監理団体からは、実習生を対象としたレクリエーションとして、カラオケやビンゴが好評であると聞き、それらをフェスティバルのプログラムに組み込んだ。

4-1-3. 第1回及び第2回フェスティバルの感想と第3回への期待

A氏は、第3回の実施前に、第1回と第2回を振り返り、「技能実習生に楽しい1日を提供するという目標は達成できた」と述べた。ただし、町民との交流についてはまだ十分とはいえないと感じている。第3回を前に町内外からの問い合わせの電話が多くなっていることから、第3回フェスティバルへの日本人参加者の増加を見込んでいた。また、年代が近い方が交流しやすいと考え、矢掛町の学校にもチラシを配布し、若者の参加を呼び掛けた。

4-1-4. 第3回の感想と今後の課題

第3回フェスティバルへは主催者発表で約1,000名の参加があった。開催日が近くなると、SNSで告知を見たという問い合わせが多くなり、A氏はインターネットの力を実感したという。また、町外からも「工場で働いているベトナム人を連れて行ってもいいか」などといった問い合わせが複数あり、実際にフェスティバルでは町外からの参加者が増えたと感じた。町内外からの参加者の増加は「毎回好評を得ている結果」だと理解している。加えて、協賛する企業や団体も増加している。その一方、期待していた若者の参加者は少なく、町民との交流も十分ではなかった。A氏は「町民の意識を変える必要」を感じているという。

4-1-5. 活動の広がり（日本語教室の発案）

A氏は、技能実習生が帰国後にいい就職をするためには、日本語能力が重要だと考え、フェスティバルと並行して、技能実習生のための日本語教室の開設を発案した。第2回フェスティバルを控えた2018年9月に、友人でもある岡山市の日本語学校経営者に相談したところ、ボランティア希望者を対象として、日本語学校講師による勉強会を行うことになった。同時に、かねてから知り合いであった矢掛町の学校長経験者C氏が趣旨に賛同し、C氏とともに日本語教室開設に向けて準備を進めることになった。当時は第1回フェスティバル実施を通し、町内のベトナム人技能実習生の存在は一部の町民に知られている状況であった。C氏は、学校教員経験者を中心として広くボランテ

ィアを募り、町役場や企業に支援を依頼しに行くなどして準備を進め、2019年4月の開講に至った。毎月1回、市の施設で日本語の学習支援を行うとともに、町内の高校生が日本文化を紹介し、一緒に体験する機会を持っている。また、第3回フェスティバルの際に、日本語教室を紹介するベトナム語のチラシを配布したところ、矢掛町在住のベトナム人女性はそのチラシを見て、ボランティアとしての参加を希望するなど、支援の輪の広がりを見せている。

表2 A氏のストーリーライン

分類	ストーリーライン
発案のきっかけ	A氏は、以前から <u>交流館の前の道</u> を自転車で通り過ぎていく外国人の存在を気にしていたが、友人の地元企業経営者から、それが <u>矢掛町の工場</u> で働くベトナム人技能実習生であることを聞いた。 <u>国の家族のために貯蓄する技能実習生の節約生活の様子</u> を知り、彼らに <u>矢掛町での楽しい時間の提供</u> をし、 <u>町民との交流</u> を、と思ったことが <u>フェスティバルの発案</u> につながった。
企画運営	フェスティバル実施に向けて、A氏は <u>情報収集と協力者の発掘と確保</u> に取り組んだ。 <u>技能実習生を抱える企業</u> 、 <u>監理団体</u> 、 <u>ベトナム人留学生の多い大学</u> など、A氏が元々持っていた <u>人的ネットワーク</u> を活用し、協力してくれそうな機関に電話をかけ、直接訪問し、 <u>協力の依頼</u> をした。その中で、 <u>協力者からの様々な情報</u> を得、 <u>フェスティバルで実施する内容の決定</u> がなされた。
第1～2回の感想と第3回への期待	A氏は、 <u>技能実習生に楽しい1日を提供する</u> という目的の達成はできたと自負している。一方で、 <u>町民との交流が不十分</u> という課題があり、第3回に向けて、 <u>町内の学校を通じて若者にも参加の呼びかけ</u> をしている。
第3回の感想と今後の課題	第3回は、 <u>町外から多数の問い合わせ</u> を得、 <u>参加者の増加と協賛企業の増加</u> という変化があった。これらは、 <u>毎回好評を得ている結果</u> だと理解している。一方で期待していた若者の参加者の少なさや <u>町民との交流との不足</u> という問題があり、 <u>町民の意識を変える必要性</u> を感じた。
活動の広がり	A氏は、 <u>技能実習生の帰国後のよりよい就職</u> を考えた際に、 <u>日本語能力の向上の重要性</u> を認識し、フェスティバルと並行して <u>技能実習生のための日本語教室開設の発案</u> を行った。日本語教室は <u>岡山市の日本語学校関係者や元学校教員の協力</u> を得て開講に至った。

※下線部は、分析によって得られた構成概念であり、これをもとにストーリーラインを作成した。

4-2. B氏のストーリーライン

B氏のインタビューで得られたテキストにおいても、話題ごとのまとまりが認められ、「ベトナム人技能実習生に対する印象」「フェスティバルの準備と運営」「矢掛町民に対する期待」「第1回及び第2回の感想と第3回への期待」「第3回の感想と今後の課題」に分類された。これらの分類に沿って表3にストーリーラインを記述し、以下で発言を引用しながらストーリーラインを説明する。

4-2-1. ベトナム人技能実習生に対する印象

B氏の自宅は矢掛町の中心部からやや離れた所にある。B氏が50代後半で矢掛町に戻った頃、自宅の前の道やスーパーで外国人らしき存在を見かけるようになっていた。

以前いた中国人でないことはわかったものの、どこの国の人かはわからなかった。ただ、彼らの素朴な様子や、節度ある行動に「なんとなく好感を抱いて」いたという。その後、A氏から、フェスティバル企画の趣旨を聞いたときに、彼らが工場で働くベトナム人技能実習生であると知った。

4-2-2. フェスティバルの準備と運営

B氏はフェスティバルの実行委員の一員として、実行委員長A氏の企画を実際の形に落とし込む役割を果たしている。第1回フェスティバル以前は、外国人を対象としたイベントを中心となって運営した経験はなく、ベトナムについて詳しいわけでもなかったが、交流館でのこれまでの他のイベントの運営経験をもとに準備に取り組んだ。第3回フェスティバルの準備の頃には、何をどのように進めればいいのか、要領を掴んだと感じている。

4-2-3. 矢掛町民に対する期待

B氏は、矢掛町がかつての宿場町で、商業の中心地でもあり、人の往来が多かった地域であることから、矢掛町民は外部の人に対する寛容さがあるという期待を抱いている。つまり、矢掛町民はベトナム人技能実習生に対してもそれほど壁を作らないはずだと期待し、フェスティバルが交流の一助になれば、と考えている。

4-2-4. 第1回及び第2回の感想と第3回への期待

その期待の一方で、フェスティバルに数多くの町民が参加しているにもかかわらず、「意外と交流しない」と感じている。第1回と第2回を振り返り、交流の乏しさの背景には、ベトナム人技能実習生と、フェスティバルに参加した矢掛町民との年齢差があると考え、第3回に向けて、より多くの若者の参加に期待していた。

4-2-5. 第3回の感想と今後の課題

第3回は参加者の増加により、参加者が会場から溢れんばかりの状態であった。関係者以外の一般の日本人参加者は197名だったが、期待していた若者の参加者はボランティアで受付を担当した高校生2名のみで、他にはみられなかった。また、相変わらず、町民とベトナム人技能実習生との交流はそれほどなかった。第3回までのこうした状況をふまえ、フェスティバル内で交流のための時間と企画を明確な形で確保し、若者を含めて、その交流企画への参加者を募る必要があると考えている。また、参加者数の増大による当日の会場の状況から、より大きい会場への変更や、提供できる料理の量を増やすためにベトナム人技能実習生以外を対象とした入場料の値上げの検討の必要性も感じている。さらに、第3回には、矢掛町で活動する「地域おこし協力隊」のバングラデシュ人夫婦がベンガル料理を提供した他、第3回フェスティバル後に、矢掛町在住のブラジル人グループから、ブラジル料理の提供や町民との交流を希望する声上がり、次回以降の名称の変更も含めてフェスティバルの内容拡大の検討を進めている。

表 3 B 氏のストーリーライン

分類	ストーリーライン
技能実習生 に対する 印象	B 氏は、 <u>道やスーパーでたまに見かける外国人に対し、素朴な様子や、節度のある態度を見て、好感を持っていた。</u> A 氏からフェスティバルの企画趣旨を聞いた際、彼らが <u>ベトナム人技能実習生</u> であることを知った。
準備と運営	B 氏は <u>実行委員長 A 氏の企画を実際の形に落とし込む役割を果たしている。</u> 第 1 回以前は、 <u>外国人を対象としたイベント運営の未経験</u> という不安があったが、 <u>交流館でのこれまでのイベント運営の経験</u> をもとに準備を進めた。
矢掛町民に 対する期待	B 氏は、 <u>矢掛町がかつての宿場町で、商業の中心地</u> でもあり、 <u>歴史的に人の出入りが多い地域</u> であったことから、 <u>外部の人間に対する寛容さ</u> があるはずだと感じている。そのことから、 <u>技能実習生との交流の可能性への期待</u> を抱いている。
第 1～2 回の 感想と第 3 回への期待	第 1～2 回フェスティバルでは、 <u>協賛・協力団体関係者以外で、100 名強の日本人参加者がいたが、技能実習生との交流の乏しさ</u> を感じた。その理由として B 氏は <u>町民と実習生の年齢差</u> をあげ、 <u>第 3 回に向けて若者の参加者増加への期待</u> を持った。
第 3 回の 感想と 今後の課題	第 3 回フェスティバルは <u>参加者の増大により会場から人が溢れんばかりの状態</u> で、 <u>次回以降は会場の変更も含めた検討の必要性</u> を感じている。合わせて、 <u>技能実習生以外の一般客の入場料の値上げや、料理待ちの混雑緩和のための食券制度の導入</u> を検討したいと考えている。また、 <u>第 3 回も数多くの日本人参加者がいたが交流の乏しさ</u> は改善できていない。 <u>交流のための時間を明確な形で設ける必要性</u> を感じている。フェスティバル後、 <u>町内在住のブラジル人のグループから、ブラジル料理屋台の出店希望や町民との交流希望の声</u> が上がった。次回以降、 <u>フェスティバルの名称の変更</u> をし、 <u>イベントの対象者を拡大する可能性</u> を検討している。

※下線部は、分析によって得られた構成概念であり、これをもとにストーリーラインを作成した。

4-3. 理論記述

A 氏及び B 氏のストーリーラインから理論記述を行い、表 4 に示す。理論記述は、その内容によって【技能実習生を巻き込んだ地域のイベントの成立】【同イベントの運営と課題】【活動の広がり】に分類された。

【技能実習生を巻き込んだ地域のイベントの成立】として、矢掛町の事例からは、技能実習生と特別な関わりのない一個人や団体であっても、その地域で働く技能実習生に対する理解やホスピタリティ、あるいは、町おこしなどの目的によって、技能実習生を巻き込んだ地域でのイベントを成立させうることを示されたといえる。その際、技能実習生の受け入れに関与する監理団体や企業、そして、同じ言語や文化背景を持つ留学生などとの連携がイベント成立の重要な鍵であると考えられる。

【技能実習生を巻き込んだ地域のイベントの運営と課題】では、矢掛町の事例から、関係各所と連携を取りながら企画案を作り上げ、イベント成功に向けて関係者を牽引する存在と、その企画案を具体的な計画に落とし込み、実行に移す実務家の存在が両輪となって、イベントの円滑な運営を可能にすることが示された。また、地域のイベントを通じて技能実習生に楽しい時間を提供することは可能であるが、技能実習生と地域の人の交流を芽生えさせるには、そのための仕掛けが必要であることも示唆された。

【活動の広がり】として、地域で技能実習生を巻き込んだイベントを開催することは、地域の一員としての技能実習生の存在を可視化することにつながり、その後の活動の広がりのきっかけとなりうるといえる。すなわち、技能実習生と関わりを持つ人の輪を企業外に広げたり、一過性のイベントから、日本語教室のような継続的な活動へとつながったりするきっかけになりうる。また、こうしたイベントは、様々な文化や立場の人を受け入れるという地域の姿勢を内外にアピールすることになり、他の文化や多様な立場の人をも巻き込んだ活動に拡大する可能性を秘めているといえる。

表 4 理論記述

分類	理論記述
イベントの成立	<ul style="list-style-type: none"> ・地域で働く技能実習生の状況に対する理解とホスピタリティが、技能実習生を巻き込んだ地域でのイベントの成立のきっかけとなりうる。 ・技能実習生を巻き込んだイベントは、町おこしの一環として成立しうる。 ・技能実習生と特別な関わりがない個人や団体でも、技能実習生やその出身国と関わりを持つ個人や団体と連携すれば、技能実習生を対象としたイベントを開催しうる。
イベントの運営と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・外部の機関と連携しながら企画案を作り上げて関係者を牽引する存在と、企画案を具体的な計画に落とし込み、実行に移す実務家の存在があれば、イベントの円滑な運営が可能である。 ・地域のイベントを通じて、技能実習生に楽しい時間を提供しうる。 ・技能実習生と地域の人が同じ場所に集まるだけでは、交流は芽生えにくく、交流を促進するには、そのための仕掛けが必要である。
活動の広がり	<ul style="list-style-type: none"> ・イベント開催を通じて、地域の一員としての技能実習生の姿が可視化される。 ・技能実習生の姿が可視化されることにより、彼らと関わりを持ったり支援をしたりする人の輪が広がる。 ・技能実習生を取りまく状況を地域の人が知ることにより、一過性のイベントから、継続的な支援や活動へとつながりうる。 ・イベント開催を通じて、様々な文化や立場の人を受け入れる姿勢を見せることにより、他の文化や他の立場の人へと活動が広がる可能性がある。

5. 考察

以上の結果をふまえ、フェスティバルの活動の経緯と広がりについて考察する。

フェスティバル実施以前から、A氏とB氏のいずれも、町に外国人がいることを認識していたが、彼らがどのような存在なのかは把握しておらず、この状況はおそらく、他の多くの町民も同様であったと考えられる。梶田・丹野・樋口(2005)は、日系ブラジル人労働者を取りまく環境をまとめ、「外国人労働者がそこに存在しつつも、社会生活を欠いているがゆえに地域社会から認知されない存在となること」を「顔の見えない定住化」と定義したが、まさにこれに重なる状況だといえる。そんな中、元々ベトナムとも技能実習生とも関わりがなかったA氏がフェスティバルを起案した背景には、A氏の個人的な特性とともに、観光促進と町おこしを目的とする施設の運営責任者であ

ることが深く関わっていると考えられる。A氏は、当初、観光に興味を持つことが予想される町内在住の外国人が何故、矢掛町の観光の中心である交流館に全く来ようとしなかったのか、という疑問を抱いていた。この疑問が、後に彼らが工場で働くベトナム人技能実習生であるとわかった際に、彼らの勤務先である町内の工場に実際に足を運ぶ動機の一つとなったと考えられる。さらに、彼らが国の家族のために日々の生活費を切り詰めているという状況を知り、そんな彼らを矢掛町でもてなしたいという気持ちを抱いた。「矢掛町での楽しい思い出を持って帰ってほしい」というホスピタリティと同時に、「町民との交流を」という思いがあったことについても言及しており、この背景には、技能実習生のため、という観点と、矢掛町と町民のため、という観点があったと考えられる。毛受（2016）は、少子高齢化と人口減少が進む中、地域活性化のためには、自治体が外国人を積極的に受け入れ、共生の道を模索する政策をとることが必要だとしたが、A氏もこれと同様に、町おこしの観点から、技能実習生と町民の交流の必要性を感じたのではないだろうか。実際に、岡山県美作市や北海道紋別市では、行政が旗振り役となって、技能実習生を積極的に受け入れ、技能実習生と市民との交流機会を創出することで地域活性化を図っている（e.g., 中園, 2020 ; 二階堂, 2019a,2019b）のは前述のとおりである。

A氏がフェスティバルを発案してから実際に実行に移すまでには、A氏のアイデアを具体的な計画に落とし込んで実行するB氏の存在が大きかったが、それと同時に、A氏による人的ネットワークの拡大が重要な役割を果たしている。A氏はそれまでに培った人的ネットワークを土台に、フェスティバル発案後、技能実習生やベトナムに関わりのある様々な団体に連絡をとったり、実際に訪問したりして、協力を取り付けた。その結果、2019年の第3回フェスティバルには、協力団体として、岡山市の2大学、倉敷市の監理団体、ベトナム航空、福山市のベトナム料理店などが名を連ね、地元企業15社と地域のロータリークラブやライオンズクラブなどが協賛した。このようなA氏の精力的な声かけによる人的ネットワークの拡大は、協力者のマンパワーや協賛金とともに、ベトナム人技能実習生に関する情報や運営のアイデアをA氏とB氏のもとにもたらし、フェスティバルのプログラム決定にも寄与した。

またA氏はフェスティバルと並行して、技能実習生のための日本語教室の開設を発案し、第1回フェスティバルの後に、その準備に向けて行動を開始した。そこでも、A氏の人的ネットワークが活用され、友人でもある日本語学校経営者の支援を受けた他、元学校教員のC氏が中心的な存在として関わることとなった。その後、C氏によってさらにネットワークは拡大し、現在の日本語教室はC氏を代表者として町民の有志によって運営されている。毎回、日本語教室には約10名の町民の他、地元の高校生がボランティアとして参加している。このように多くの町民が日本語教室に関わるようになった背景には、かつて「顔の見えない」存在だったベトナム人技能実習生が、フェス

ティバルの実施により「顔の見える」存在になったことがあると考えられる。町の中心部にある交流館でフェスティバルが開催されたことにより、多くのベトナム人技能実習生が矢掛町で暮らしていることを目で見て知り、ビンゴやカラオケを楽しむ姿を間近で見、ベトナムの料理や音楽に触れる機会が町民に提供された。こうした機会がない限り、町民と技能実習生はただ単に街ですれ違うだけの関係で、それ以上の関わりを持つという考えは生まれなかったかもしれない。

過去 3 回のフェスティバルの課題として、技能実習生と町民の交流の乏しさが挙げられている。また、第 3 回フェスティバルでは、参加者の増大により、会場が手狭になり、今後の対応を検討する必要がある。さらに、矢掛町在住のブラジル人グループからもフェスティバルへの出店と町民との交流を希望する声があった。2020 年は新型コロナウイルス感染拡大防止のためにフェスティバルは実施されなかったが、会場や名称の変更など、今後のフェスティバル実施に向けての分岐点にあるといえる。これらの状況に対して、B 氏はすでにいくつかの具体的な対応策を考えており、今後のフェスティバルの運営において、具体的な準備や実行にあたる B 氏の果たす役割の大きさが増すことが予想される。

活動の広がりという観点から、前述の日本語教室の他に、フェスティバルそのものが拡大している点も見逃せない。参加者の増大はもちろん、バングラデシュ人の地域おこし協力隊員の関与や、ブラジル人グループの参加希望など、関わる国籍が多様化している。これは、フェスティバル実施により、様々な文化や立場の人を受け入れるという地域の姿勢を内外にアピールできた結果だと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、矢掛町ベトナムフェスティバルの企画運営者 2 名のインタビュー分析を通じて、活動の経緯と広がりについて明らかにした。具体的には、ベトナムとも技能実習生とも関わりを持たなかった 2 名がどのような経緯でベトナム人技能実習生を巻き込んだ地域のイベントを企画するに至ったのか、また、イベント実施に向けてどのような動きがあったのか、さらに、イベントの成果や課題及び今後の展望、イベントと関連した他の活動への広がりについてまとめた。

今回の事例では、イベントの企画から実施に至るまで、人的ネットワークを拡大しながら活動を牽引する存在と、具体的な計画を練り実行する存在が両輪となって進む様子が明らかになった。また、人的ネットワークの活用と、イベント実施の効果によって、さらなる活動の拡大につながる様子が示された。こうしたイベントの実施により、「顔の见えない」外国人労働者の存在が可視化されるとともに、多様な存在を受け入れようとする地域の姿勢を内外にアピールできるといえる。

今後の課題として、技能実習生や一般の町民から見てこうしたイベントがどのよう

な意味を持つのかを検討することの他，日本語教室の活動の様子を追うことなどが挙げられる。地方部での外国人人口が増える中，徳田（2019）で指摘されたように，各地域での取り組みを記録し，蓄積していくことの重要性は今後，ますます高まると考えられる。

注

- (1) 朝日新聞デジタル「矢掛屋『アルベルゴ・ディフーズ』認定」2018年6月14日付記事 <<https://www.asahi.com/articles/ASL6D4519L6DPPZB00K.html>>（2020年12月7日最終閲覧）※アルベルゴ・ディフーズとは，地域に分散する空き家を宿泊施設や食堂として活用し，その地域全体でホテルの機能を構成するもので，過疎化に悩む地域の振興策として欧州を中心に広まりつつある。
- (2) 岡山県中山間・地域振興課「県内の過疎指定地域（平成29年4月1日時点）」<https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/465443_3261323_misc.pdf>（2020年12月7日最終閲覧）
- (3) 山陽新聞デジタル「日本語学び『矢掛ライフ』充実を 元教諭ら 外国人実習生向けに教室」2019年5月13日付記事 <<https://www.sanyonews.jp/article/898127>>（2020年12月7日最終閲覧）
- (4) 2020年は，新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け，開催が見合わされた。
- (5) 厚生労働省岡山労働局「外国人の雇用状況の届出状況について」<https://jsite.mhlw.go.jp/okayama-roudoukyoku/hourei_seido_tetsuzuki/foriegnerkoyo/forienerkoyo_law/_00003.html>（2020年12月10日最終閲覧）
- (6) 公益社団法人国際人材協力機構「外国人技能実習制度とは」<<https://www.jitco.or.jp/ja/regulation/>>（2020年12月10日最終閲覧）
- (7) やかげ町家交流館 <<http://yakagemachiya.information.jp/>>（2020年12月10日最終閲覧）

引用文献

- NHK取材班（2019）.『データでよみとく外国人“依存”ニッポン』光文社.
- 大谷 尚（2008）.「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』54, 27-44.
- 大谷 尚（2011）.「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』10, 155-160.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人（2005）.『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と国家・

- 市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会。
- 巢内尚子 (2019).『奴隷労働 ベトナム人技能実習生の実態』花伝社。
- 徳田 剛 (2019).「日本の地方部における多文化化対応の現況」徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子 (編著)『地方発外国人住民との地域づくり—多文化共生の現場から—』晃洋書房, 序章 (pp.1-17).
- 中園桐代 (2020).「地域の『担い手』として外国人技能実習生を受け入れる人口減少自治体の試み—紋別市国際交流サロンを事例に一」『商工金融』70, 40-63.
- 二階堂裕子 (2016).「『非集住地域』における日本語学習支援活動を通じた外国人住民の支援と包摂—ベトナム人技能実習生の事例から—」徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子 (編著)『外国人住民の「非集住地域の地域特性と生活課題—結節点としてのカトリック教会・日本語教室・民族学校の視点から—」創風社出版, 第2章(pp.81-103).
- 二階堂裕子 (2019a).「中山間地域における外国人技能実習生の受け入れ政策」徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子 (編著)『地方発外国人住民との地域づくり—多文化共生の現場から—』晃洋書房, 第二章 (pp.35-51).
- 二階堂裕子 (2019b).「外国人技能実習生と地域住民の顔の見える関係の構築—岡山県美作市における地域再生の試み—」『社会分析』46, 63-81.
- 毛受敏浩 (2016).『自治体がひらく日本の移民政策—人口減少時代の多文化共生への挑戦』明石書店。
- 望月優大 (2019).『ふたつの日本 「移民国家」の建前と現実』講談社。

付記

本稿は、科学研究費挑戦的研究（萌芽）19K21739「外国人との交流活動が日本人に及ぼす効果を検証する挑戦的研究」（代表：関崎博紀）の研究成果の一部である。

謝辞

本調査に快くご協力下さった,やかげ町家交流館の皆様と関係者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。